

に満ちたものになっていることを、周囲の人たちは感じとるべきであろう。

2. 登校拒否のメカニズム

(1) 登校拒否を起こす原因

登校拒否の原因はいろいろ考えられるが、決定的にこれという決め手はないといわれている。しかし、子供の性格特性などを調べてみると、登校拒否児としての共通した傾向をみることができる。

そこで、登校拒否を、個人的な現象としてみるだけでなく、広く社会的な現象としてみていくことは、複雑な原因を探究する上で、大切なことであり、必要なことでもある。

① 個としての問題性

登校拒否を起こす子供の性格特性について、小泉英二氏は、内気で引っ込み思案で社会性に欠け、対人関係では感じやすく、自我がたやすく傷つけられやすい。従って、集団内では控え目で受動的であり、社会的な場では、自己抑制的であると述べている。

また、佐藤修策氏も、下表のように、性格・行動の特性を挙げている。

表1 子供の性格・行動の特性

性 格	行 動
活気に欠ける	きちょうめん
消 極 的	無 口
無 力 的	非 協 力 的
内 向 的	友人が少ない
小 心	人 に 頼 る
弱 気	わ が ま ま
心 配 性	やさしすぎる
ま じ め	

このような性格特性を持つ子供は、学校や家庭の中でのさ細なトラブル（テストや給食、教師・友人関係、親のしつ責等）が引き金となって、登校拒否を起こす例が、多いようである。

② 家族関係の問題性

子供の性格特性は、生まれつきの気質の上に、家族関係という、最も重要な影響を与えている要因によって、ある程度、形づくられるという

ことができる。そこで、登校拒否を起こすような子供の家族関係をみると、次のようなことが浮かび上がってくる。

両親の関係は、相互に期待するところが合致せず、生活目標・人生の態度に、大きな相違があるままで調整されず、お互いが共有的・相補的傾向に乏しいため、不信感や不安状態に陥りやすい。そのため、子供は、どちらか一方の親を軽くみるようになり、片親同然の心理、つまり、心理的不在感を持つようになってしまうのである。

また、甘やかしすぎの母親と、無力で受身的な父親のもとでは、子供は、わがままで強情、自分本位であり、家を離れた学校のような社会的な場では、臆病で消極的になりやすい。その反対に、厳しく支配的で口やかましい母親と、受身的な父親のもとでは、子供は、家では受身的で従順であるが、外では臆病であるか、攻撃的になりやすい。

これらをまとめてみると、

父と子の関係は、ア. 母性代行的な父親、イ. 父子関係の弱い父親、ウ. 社会的には活動しているが、心理的に不在の父親。

母と子の関係は、ア. 服従型の過保護、イ. 支配型の過保護、ウ. 固着的過保護。

のタイプになる。

③ 地域社会の問題性

個及び家族関係の問題と同時に、登校拒否の背景として、社会情勢も切り離して考えることはできない。

登校拒否が注目されるようになったのは、経済構造が、高度成長経済政策のもとで、大きく転換した時期である。物資の過剰供給は、消費は美徳の考えを生み、社会的な意識を変え、価値観も多様化して来た。多様な価値観のもとでは、個人の行動は極めて自由であるが、一方では、自由なるが故に、たえず選択を迫られ、強い自我が要求されるのである。

このような社会構造の変化のもとでは、従順で自我の縮した、いわゆる「いい子」は社会